

新宿区立

つね  
中村彝アトリエ記念館

T s u n e N a k a m u r a A T E L I E R M U S E U M



入場  
無料

開館時間 | 午前10時 ▷ 午後4時30分  
休 館 | 月曜日 (休日にあたる時はその翌日)  
| 年未年始 (12月29日~1月3日)

交通の  
ご案内

電車: JR山手線「目白駅」下車徒歩10分  
バス: 都営バス(池65・白61)「下落合三丁目」下車徒歩5分  
※車でのお来館はできません。

新宿区立中村彝  
アトリエ記念館

東京都新宿区下落合3-5-7  
TEL: 03-5906-5671  
FAX: 03-5906-5672  
<http://www.regasu-shinjuku.or.jp>

指定管理者: 公益財団法人新宿未来創造財団

新宿区立

# 中村彝アトリエ記念館



なかむらつね  
中村彝  
(1887~1924)

中村彝は、明治20年(1887)、現在の茨城県水戸市金町に、旧水戸藩士中村順正と妻よしの三男として生まれました。間もなく父を亡くし、11歳のときに母を亡くすと、陸軍軍人の長兄を頼って上京、牛込や大久保に住み、愛日尋常高等小学校(現 愛日小学校)を卒業、早稲田中学に入学します。その後、長兄・次兄と同じく陸軍軍人をめざし、名古屋陸軍地方幼年学校に進みますが、肺結核と診断されたために軍人の道を断念、画家を志すようになります。白馬会や太平洋画会の研究所で学び、明治43年(1910)、第4回文部省美術展覧会(文展)に出品した『海辺の村(白壁の家)』で

三等賞を、翌年の第5回文展においても『女』で三等賞を受賞するなど、新進の画家としての地位を確かなものとしていきました。一方、17歳で発症した肺結核は、一進一退の状況で、無理をすると発熱や喀血がありました。

明治44年(1911)新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻の厚意で中村屋裏のアトリエに移りますが、絵のモデルとなった相馬家の長女俊子との恋愛を反対され、失意のうちに中村屋を去り、大正5年(1916)8月、下落合にアトリエを新築しました。あまり外出のできなかった彝は、このアトリエをこよなく愛し、悪化する肺結核と闘いながら作品の制作を続けました。しかし、大正13年(1924)12月24日肺結核による咯血のため、37年の短い生涯を閉じました。

下落合のアトリエでの彝は、長時間の制作は難しくなっていました。断続的にカンヴァスに向かい、画友鶴田吾郎と競作した『エロシエンコ氏の像』をはじめ、『カルピスの包み紙のある静物』、『頭蓋骨を持てる自画像』、『老母の像』などの作品を描きました。



中村彝が大正5年に新築したアトリエを復元整備し、平成25年3月17日に「新宿区立中村彝アトリエ記念館」として開館しました。アトリエ内部や管理棟の展示スペースでは、映像やグラフィックパネルで、彝の作品や生涯について紹介しています。

## 落合記念館散策マップ

OCHIAI WALKING MAP AMONG THE THREE MUSEUMS

